

[講演会抄録]

2015年度 現代史研究所連続研究講座

EU統合はヨーロッパの救世主足り得るのか？

第4回 EU統合とフランス

2015年6月15日

渡邊 啓貴（東京外国語大学大学院 教授）

1. 文化的相互理解の時代

今、小久保先生からご紹介にあずかりました渡邊です。きょうは1時間、ここでフランスのお話をさせていただきます。

ところで皆さんが持つフランスのイメージってどういうものなのでしょう。フランスと言うと何が浮かびますか。

フランス文化というと何となくエレガントで付加価値が高い、そういう感じを持たれると思います。実は、皆さん、装飾品とか宝石とかそういうものを売ったのはフランスです。そのときに図柄入りの厚いカタログをつくる。貴族であるとかヨーロッパの王侯貴族がお客です。実はそのカタログはフランス語でしか書かれていない。フランス語が読めないと、高級品が買えない。しょうがないので、みんな、フランス語ができるようになった。

啓蒙専制君主の時代は絶対王政で、スウェーデンの国王がフランスを見習って、まちづくりをし、ベルサイユ宮殿をまねして、プロシア国王が王宮をつくった。ものを買うのにフランス語がわからなきゃいけない。フランス語の勉強をしたら、フランスびいきになります。言葉というのは、文化外交の重要な要素なんです。世界中の人が日本語をしゃべれば、みんな、日本びいきになってくれます。

君たちはとっても今いい時期なんです。世界中で若い人たちは日本の文化に理解を示しています。この三月にわたしはボルド政治学院で集中講義をしましたが、学生は日本文化にとっても詳しかった。僕とか小久保先生が海外に留学した時期はね、フランス人やヨーロッパ人はプライドが高い。多少、フランス語ができてね、15分から30分ぐらいたつと、手持ちぶさたになって、何をしゃべっていいかわからなくなる。よっぽど共通のテーマがあったり、日本のことに詳しく、おれは柔道をやっているからとかという人だったら別ですけど。

今、君たち、言葉なんかたいしてできなくても、『ポケモン』、『NARUTO』、『ワンピース』、これについて語れば、君たち、だれでもすぐ友達になれる。1時間ぐらいはすぐしゃべれます。

まとめて言えば、こういう価値体系、思考様式、生活様式、こういうものの相互理解が深まっています。で、外交そのものもそういう意味で言えば文化なんです。外交というのは、もちろん経済交渉、戦争回避のための経営交渉、条約締結、こういったことはとても重要なことですが、それは結果で形になって表れてくるものです。しかしその背景には文化の交流、相互理解関係の向上が必要です。実はこの点が統合を進めていく上でとても重要なことです。

例えば尖閣諸島問題をめぐって中国NPOが勝手に上陸してきたりした。50年、100年前だったら、もう戦争ですよ。でも、今、戦争にならないですよ。ここにも結構いらっしゃると思うけど、日本には中国人の留学生が多い。私の教えている大学にも多いですね。で、話しをします。ここも前だったら戦争だと。じゃ、戦争が起こると思う人？ ほとんどの人が戦争が起こるとはだれも思わない。なぜならば、日本人も中国人も自由に行き来しているし、中国人の中でも日本語しゃべれる人が多い。中国人で日本語をしゃべれて、昔は日本語はできて、英語はできなかったけど、最近の中国人、日本語ができて、英語もできます。僕の研究室

の中国人留学生、外資系の企業で英語もできる日本人を採りたいという会社の企業が中国人を採用している。

この間、ある多国籍企業のカナダ人の部長さんと話した。実は日本人を雇おうと思ってリクルートしているんだけど、中国人が半分来ちゃうと言っていました。なかなか優秀なんだと。こういうふうになってきています、今は。

こういうふうに入々の行き来が盛んになりますと、お互いの価値や文化を共有するようになります。そして文化・価値の共有が非常に高い段階の相互理解までに世界で最も進んでいる地域はヨーロッパです。つまりEU。だから、よく言いますが、EUというのは、キリスト教徒とかギリシャとかローマ文化、場合によってはユダヤの文化も有していますけれども、こういうふうな文化的、歴史的共有観が非常にある、価値を共有しているところだというのがEUだと言われるところであります。それがEUの本質であります。

2. 危機感をバネにして進む統合

なぜ統合が進むんだろう。いろいろな理由がありますし、また、今申し上げたような価値を共有するとか、そういうところから言えばね、共通項がたくさんある。そういうことだから進みやすい、そういう地域だからというのがあります。

そのきっかけというのがそれぞれの国が共通の危機に直面している、危機感を持っている時期に比較的進みやすい、力を合わせやすい。まあ、逆に言えば、そういう危機だから離れてしまうということもありますが、ヨーロッパの場合はみんなで力を合わせてやっていこうじゃないか。第一次世界大戦もみんなです。第一次世界大戦までヨーロッパは世界のリーダーシップを発揮していましたが、その後はアメリカの時代になってしまう。アメリカがやっぱり世界だということがはっきりしてきます。

そこで、第一次世界大戦後、クーデンホーフ・カレルギーという人を中心に、そのヨーロッパをみんなで協力して、立ち直らなくては行けない。ヨーロッパは実は自信をなくしてしまっただけです。西欧の没落だということで自信をなくした。もう一度、元気になろうじゃないか。クーデンホーフ・カレルギーというチェコの領主ですね。この人がヨーロッパを統合しようということを出すんですけども、クーデンホーフ・カレルギーのお母さんというのは実は青山光子という日本人だったんです。とても珍しいことですよ、当時としては。彼のお父さんは明治時代に日本人の女の人と結婚した。ぜひ、皆さん、青山光子さんの『妾の半生』という本をぜひお読みになってください。

東京の骨董屋さんの娘さんです。お父さんのクーデンホーフ・カレルギーが、日本に外交官として駐在していたときに、日本の骨董品を集める趣味があった。週末になると骨董品の買い物をしていました。そこのお嬢さん、18歳の光子さんという人が見染められて結婚しました。結婚して幸せな日々だったんですが、本国に帰るということになる。当時として、明治時代ですから、大変な話です。言葉はできない。まだはたちぐらいのお嬢さんが子どもを連れて、ばあやを1人連れて行く。今みたいにね、12時間飛行機に乗っちゃえば、ヒョイと行けるという時代じゃないです。船で行って、1カ月以上かかる。行った以上は帰って来られない。そのぐらいの覚悟で行ったんです。

行ったけれども、そこは名立たる貴族のうちです、お城です。こんな日本の、日本と言っても当時ですから、極東のわけのわからん、小さな国の娘を連れてきて何だ、という冷たい目で、この城に入れるなどか言われる。ところが、不幸なことに、だんなさんが数年後に亡くなっちゃいます。さあ、どうする。彼女は随分頑張って、子どもを抱いて、私はここを去らない。日本に帰らない。城で子どもを育てます。そして子どもを育てた後に、もう子育てもなくなったということで、さっさとこん

な大きな城は要らないということで、お城を辞して、小さなうちに住み始めたという、そういう女性だったそうです。

その子ども、カレルギーがヨーロッパは1つにならなければいけないということで、1920年代にヨーロッパ統合運動を起こします。彼はこうした自分の生い立ちをめぐる価値・文化の交流を体現していた人物だった。ある意味では必然性のようなものが会ったと言ってよい。

フランスの首相、エリオという人が、『ヨーロッパ合衆国』という本を書いています。ヨーロッパは第一次大戦後、最も危機にあり、そしてお互いつながらなくてはいけない。1人じゃ無理だから、みんなで協力しようじゃないかということ、そのときにこういうふうには書いています。自分たちが妹だと思っていたアメリカが、自分たちを追い抜いちゃった。ヨーロッパを追い抜いちゃった。そしてつらつら目をアジア、極東のほうに向けてみると、勤勉、刻苦勉励で頑張っている小さな日本が追い付いてきた。1926年に書かれた本にはそう書いています。

そして1980年代半ばに欧州統合で、域内市場統合、ヨーロッパを1つの市場にしようという話をドロールという人が言い出します。この人もフランス人です。その人が書いている本に『ヨーロッパあつてのフランス』という本があります。その本にこう書いてあります。ヨーロッパはこれからもっと1つになって頑張らなければいけない。アメリカに対抗し、そして日本に追い抜かれないようにしなきゃいけない。同じ言葉が書いてあります。60年たって、ヨーロッパ統合、アメリカと日本に追いつき、追い越されちゃった。自分たちは落ち込んでいる。頑張らなきゃいけない。振り返ってみると、自分たちは価値観を共通にする仲間で、みんなで一生懸命頑張っていけば立派な地域共同体ができるだろう。これが欧州統合であり、そしてこの中でフランスというのは中心的な位置を占めていったんです。

3. アメリカと対抗し、独仏協力と国家連合主義を主張したドゴールの時代

戦後の復興をするときに、日本はアメリカの支援で戦後復興をします。ヨーロッパも同じように、アメリカの支援を受けながら、ヨーロッパの統合を進めていく中で、戦後復興を遂げました。フランスはそれ以来今でもヨーロッパの中心だと考えています。そしてフランスにとって重要なのはアメリカとの関係、それからドイツとの関係です。

ドイツとの関係はとても重要なことになっていますね。第二次大戦のときにナチスが西側に攻めてきて、フランスとベルギーを攻めてくる。そのときにフランスは最初に降参、降参と言って、休戦条約を結びました。それだ争っていたドイツと戦後どうするのか。とても重要な問題です。

(ドゴールの写真をさしながら) これは皆さん、ベルリン大学の前で撮っているとゴールの写真をみてください。第二次大戦、これ、シャンゼリゼです。フランスをナチスの支配から解放した英雄がドゴールです。私が最近書いた『シャルル・ドゴール』といがありますが、ちょっと厚いですが、物語ふうにしたので、ぜひフランスに興味がある人は読んでください。

このドゴールという人は軍人で、戦車部隊の隊長です。フランスがナチスに打ち負かされているときに、戦車軍団を引き連れて、1人、悪戦苦闘して戦ったんです。

(別の写真をさして) これはシトロエンのDSという車です。フランスがつくった名車です。20年間、1957年から75年、約20年間だけつくられた車です。最初は変な形の車だと言われたんですけど、大統領の車として使われました。

ドゴールという人はとても勇猛果敢な軍人大統領なんですが、実は次女のお子さんというのがダウン症だったんです。だから、18歳ぐらいで亡くなっちゃうんですけど、とても家庭的には苦労した人です。そ

れをフランス国民は知っている。海外の人は余り知らないですけど。とても敬虔なカトリックで、キリスト教徒で、そして人の情けに厚い人だったというふうに聞きます。ただ、軍人なので、かなり右寄りの人だというふうにも言われています。

このドゴールはですね、1つ、覚えておいてください。フランスというのは、さっきも言ったように、EC、欧州統合に中心となって貢献した国です。自分たちが中心だという。後で少しまた紹介しますけれども、そのときに重要だったパートナーはドイツです。ドイツとフランスが中心になって協力してやらない限りはヨーロッパの統一というのはとてもできないです。それでフランスとドイツの協力によって進められたんです。

しかし、フランスはもう1つ、このことを覚えて帰ってほしいんですが、フランスという国は自分の国の、ちょっと難しい言葉ですけども、自分の国の国家の主権を放棄してまで、そこまでやって統合ということは、おそらく今でも考えていないと思います。

もうひとつ、キーポイントになる言葉は、国家連合主義と連邦主義という言葉です。

国家連合主義というのは、今言ったように国の主権、主権というのは、私はわかりやすく言えば、国家が持っている基本的人権のようなものと考えています。わかりにくいかもしれない。人間はみんな、基本的人権を持っています。生まれながらにして人間として存在するんだったら、当たり前権利を持っています。当たり前だという権利は、財産保持権とか、理由なく拘束されない、それから発言をする自由と出版をする自由を持っている、政治に参加する自由を持っている。まあ、こういった自由です。

国家主権というのは国にとっての基本的権利です。その国の利益、国の外交権、独自の軍隊を持つ権利、通貨を発行する権利、その国で起き

た犯罪を裁く権利などです。こういったもともと固有の国家が有する権利を維持しながら協力を進めていくというというのは簡単ではありません。

連邦主義というのは、説明の仕方がちょっとラフかもしれませんが、そういった各国が持つ権利を主張するのをやめて、みんなで話し合っ、そうした権利を共有していく。そして1つの全体として、各国がひとつになってひとつの国家になろうじゃないかということです。それを連邦主義と言います。

次にこのドゴールの時代にとっても重要なことが行われました。これも覚えておいてほしいことですが、1963年に独仏条約というのを結びます。ここで新たにドイツとフランスは協力してやるということを確認します。これはアメリカとの関係があったんです。ドイツがアメリカとの関係に冷やかになって、フランスにくつつく。

戦後の欧州統合が独仏の協力による欧州石炭鉄鋼共同体から出発するということは皆さんご存知ですね。その約十年後に改めて独仏は協力の強化を約束する訳です。で、ドゴールというのは、ヨーロッパ統合に賛成だったんですが、さっき言った連邦主義、自分の主権や利益を捨ててまで統合してということには抵抗しました。

4. イギリス加盟を認め、通貨統合の準備をしたポンピドー・ジスカールの時代

その後に大統領になるのが、これは皆さん、パリに行ったら必ず行くと思うんですけども、現代美術館、ポンピドー美術館という名前で見られている大統領です。聞いたことあると思いますけど、次に大統領になるのがこのポンピドーという人です。ドゴールを支えた人です。まあ、この人のときにドゴールのような頑固な人間とは違って、イギリスの

ECへの加盟が実現して、ECはアメリカとも仲良くするという政策になります。ドゴールはアングロサクソンは大嫌い、イギリスとはやりたくないということで、イギリス加盟新星和三回も拒否した。その後、このポンピドーがイギリスを入れ、NATO、つまりアメリカとも協力するようになります。

その後、この人、早く病気で亡くなっちゃうので、1974年に大統領になったのが、ジスカル・デスタンという貴族です。エリート校を2つも出て、テニスをやり、アコーディオンを弾き、ピアノを弾くエリートですね。お城に住んで、アフリカまで自家用機を飛ばして狩りをするという趣味をお持ちでした。

実はこの人がECの統合に大きく貢献します。西ドイツのシュミット首相と協力をして、今、皆さんがユーロという共通通貨を使ったことがあると思いますが、通貨統合を進めるというプログラムをつくりました。フランスのジスカル・デスタンというこの大統領と西ドイツのシュミット首相という人が話し合っ、1970年代からEMSと呼ばれる European Monetary System、欧州通貨制度、を発足させました。中央銀行、為替安定メカニズムなどの原型を作る訳です。

途中、うまく行かなくて、随分だめなんじゃないかと言われましたが、このときの案には2002年のユーロ通貨統合として実現します。最初、99年にペーパーマネーをつくりました。その2年後に実物のユーロ通貨を発行することに成功する訳です。

で、なぜ、今、2002年と言ったか、よく聞いてください。2001年の12月31日に、私と小久保先生はドイツにいました。まあ、通貨統合自体は1999年のはじめですが、そのときには今のようにユーロとか紙幣とかコインは使われていないんですね。銀行で口座を持たなきゃいけないです。2002年の1月1日の0時からユーロというのが実際に紙、紙幣として、実物通貨として使えるようになった。それで小久保先生と話

合って、当時、たまたま2人ともヨーロッパにいたんですね。2001年の12月31日の晩飯はフランクフルトでめしを食べようという話をしました。

なぜフランクフルトか。欧州通貨銀行の本部があります。欧州通貨銀行の本部があるので、その本部の前でカウントダウンをすることになった。2002年1月1日の0時にはフランクフルトの欧州通貨銀行の前で我々は待機していました。同じように考えている好きものがたくさんいましたね。通貨銀行の広場の前でベートーベンの12番が演奏されて、みんなでお祭り騒ぎをやって、そしてそこでユーロを初めて小久保先生と手にして、何を買ったか。ワインを買った。(笑) このジスカール・DESTANというのそういう通貨の統合の先鞭をつけた人です。

5. マーストリヒト条約を結んだミッテランの時代

(写真をさして) この人がミッテランです。ちょっとまた自分の宣伝になりますが、『ミッテラン時代のフランス』という私の本があります。ぜひお読みになってください。

第五共和制はドゴールの政権だったので、ずっと保守的な政権だったんですね。ところが、ミッテランという人は社会党の政治家です。もともと社会主義者でも、左翼でもない人が社会党の大統領になっちゃった、本当に。

社会主義でやっていこう、大きな一国で経済を挽回するんだと言いました。実際はうまく行かなかった。うまく行かなかったので、社会主義がうまく行かなかったので、ちょっとこの辺も難しいところですが、社会主義がうまく行かなかったので、リベラリズムに路線変更してしまいました。社会主義の大統領がリベラリズムの方向で行こうとした。そうするとうまく行かないものですから、彼が欧州統合というほうにかじを切っていくんです。フランスはやっぱり一国じゃだめだ。欧州統合の中

で自分を生かしていかなきゃだめだと。

フランスは西ドイツと仲良くすることによって、それを進めています。西ドイツのコール首相との間に独仏の蜜月の関係をつくり、進めていく。やっぱり独仏を中心にやっていこうと。ドゴールと同じように、改めてまた確認いたします。きょう、覚えておいてほしい、独仏の2つだけが、ドイツとタンデム、相乗りしてますね。自転車に相乗り自転車のことをタンデムと呼びます。一緒に自転車に乗って仲良くすること。で統合を薦めていこうとする訳です。それは冷戦が終わった後には独仏関係を中心に、政治統合をやっているところまで進みます。

ミッテランの時代には、域内市場統合が進められます。俗にいわれる「人・もの・金・サービス」の自由化です。通貨統合の準備も進められます。また欧州統合の組織改革も進められ、それまでのEC（欧州経済共同体）中心の構造が、司法内務協力と共通外交安全保障政策を含むEU（欧州連合）という呼び名に変わります（マーストリヒト条約）が、それらを強く牽引したのがミッテランの時

他方で独仏が仲良くして、英仏の関係が悪くなりました。通貨統合をしようと言ったときに、サッチャー首相は何と言ったか。「大英帝国の女王様の顔が入っていない、通貨なんか、使えるものか」と言いました。通貨統合、ユーロはイギリスではまだ使えませんね。

さて、このミッテランが亡くなります。実はここにその葬儀の写真があります。女性が2人、両脇に写っていますけれども、この若いほうの女性はミッテランの隠し子、愛人の娘ですね。正妻はこのダニエルという人ですけれども、横にいる帽子をかぶっている人はミッテランの人。愛人の娘なんです。遺言で、葬式には愛人と愛人の娘にも列席させるようにと、勝手なことをしました。言いたいことを言って、やりたいことをやって死んだ大統領ですけども、フランスらしい人です。それをこの

正妻のダニエルという人が認めたので、正妻の家族と愛人の家族がミッテランの葬儀のときに両脇に並んで、見送ることになりました。そういうところがフランスかもしれませんね。

6. 通貨統合と拡大を進めたシラクの時代

じゃ、このミッテランの後にシラクの時代になります。実はシラク大統領の時代というのは、実はアメリカと対立して、ブッシュ大統領に対して大げんかしたりしたものですから、余り注目されていないんですが、このシラク大統領の時代にフランスから見ると、欧州の統合は随分進んだんですね。さっき言った通貨の1999年か2000年のとき、このときはシラク大統領の時代です。共通外交安全保障政策が共通防衛政策へ変わるときに、1998年の英仏首脳会議が調印されます。この防衛とか軍事に関してはやっぱりイギリスと協力しなくてはいけないのですが、なかなか進まなかったイギリスとの協力を進め、英仏防衛協力条約を結んだわけですね。これね、サン・マロというところで英仏の首脳会談があって、そこで英仏が防衛政策で協力しましょうと約束をしたのが98年12月です。

ここに出ているサン・マロというところはどういうところか知っていますか。これも覚えて帰ってください。サン・マロというのは、ブルターニュ地方で、モンサンミッシェルという世界遺産のある街なんです。古城の中世の街です。そこで経済だけではなくて、軍事、防衛の共通政策の合意をとりつけた。

2000年の12月のニース首脳会議というのがあります。ここでは今、EUが28カ国といって、東ヨーロッパの国が多くだいぶ入っています。このとき、10カ国、2004年に入りますけれども、そのときの拡大を大筋で認めたのがこのニースの首脳会議です。シラクの時代です。

それから、シラクにとってはマイナス点になりましたが、欧州憲法条

約を進めたのもシラクの時代です。さっき言ったジスカール・デスタン大統領が欧州憲法条約の議案の委員会の委員長代表になって進めますが、フランスが中心として進めながら、フランスが国民投票で批准を拒否したのは2005年です。シラクはね、今はもうちょっとアルツハイマーで怪しい段階にいます。かなりお年を取っている。

この人は随分女性にもてた。(笑) 世界中に子どもがいると言われてます。日本人の間にもいるという話です。日本がとても好きです。太っ腹の親分肌の人になっていますけれども、背もこんなに高い。

7. 緊縮財政と独仏緊密のサルコジ・オランド時代

2007年に大統領になるのがサルコジという人です。これも写真を見てください。シラクと違って、日本は大嫌い。彼が大統領ときにはほとんど日本に来ませんでした。サミットのときに一度、洞爺湖に来て、2日ぐらいいた。途中から、終わらないうちに帰っちゃいました。それから3.11の地震のときに福島に行くんだと言って、みんな忙しいときに五時間だけ日本に立ち寄った。よく動く、フットワークのいい大統領でした。同時にお金とか利権とかのスキャンダルの絶えない人です。

それから彼は、スタイルのいい、大柄な女性が好き。最初にセシリアという女性と結婚しました。で、大統領になるときは大統領夫人になるんですけど、大統領になってしばらくしたら、彼女はとっとと逃げいきます。2回目に逃げられてしまって、とうとう諦めた。そして、しばらくしたらカーラ・ブルーニというスーパーモデルですね、イタリア系の176センチの女性と旅行に行くというので、マスメディアを連れて、散々、旅行をしました。そして、そのうち結婚するということになると、これが問題になっちゃった。この人、フランスで活躍した歌手で、レコードも何枚か出しているスターなんですけれども、フランス語で仕事をしています。イタリアの名家の出身で、お金には困らない人ですが、ひと

つ問題になりました。彼女はフランス国籍じゃなかったんです。イタリア国籍だった。フランス大統領がイタリア国籍の女と結婚したということで話題になりました。まあそれだけヨーロッパの人々は国を超えた交際が分断にあるということですが、さすがに大統領夫人ともなると問題になりました。その後フランス国籍になりました。

彼も統合を一応進めたんですね。ただし、彼は最初リベラリズムでやっていきたいと言いましたけれども、これも覚えてください。2008年からのリーマンショックということで、世界の経済が非常に厳しくなります。まあ、金融恐慌のようなことになってしまいます。そうした中で財政が厳しい中財政投融资を強化しますが、その後ではやはり緊縮財政、縮小財政でやっていかなくちゃいけないということになります。

それで、ドイツのメルケル首相と、やり合った。そのうち、ドイツの経済にひかれるようになって、ドイツと同じように緊縮財政で行くという方向になります。(笑) そういうふうにもまた独仏緊密化ということで進めます。

あと、地中海政策とか、いろいろありますけど、現在のオランダ大統領の時代も独仏連帯緊縮財政政策が続けられています。

さて、フランスとドイツとの協力のところを中心に進めていったという話を勉強しました。歴代の大統領、それぞれ進めています。よく言われるのはヨーロッパ意識とかヨーロッパアイデンティティということをよく言われます。今、それが非常に揺らいでいるというのが現実です。それは各国それぞれ、経済や社会の情勢がとても厳しいから。1月にシャルリー・エブドという、例のムスリムを批判する新聞社が攻撃されて、日本でも大騒ぎになりましたよね。フランス人であるということ、そしてEUを進めていくということが必ずしも今、一致していない状況が進まっている感じがします。

今、マーストリヒト条約というのは、1992年に国民投票で認められ

ましたが、今から3年前の2012年にアンケート調査をしたところ、今だと国民の60%がこの国民投票ではNOに入れるという世論調査が出てきました。今、欧州統合を進めていくことは、フランスにとって危機じゃないか、まずいんじゃないかという懐疑主義が広がっています。そうした中で、極右の勢力、つまり、外国人を排除して、フランス人だけのフランス、ヨーロッパ人のヨーロッパということを言い出している動きがあります。極右の国民戦線というグループが支持率を伸ばしています。

ジャン・マリ・ルペンが72年に立ち上げた政党です。そして、今、三女のマリーヌという人が党首をやっています。統合の鍵を握る存在にもなりかねないと言われていています。

私の話は以上、ここで終わりにしたいと思います。10分オーバーして、申しわけありませんでした。どうもきょうはありがとうございました。
(拍手)